

研究助成実施報告書

助成実施年度	2020 年度
研究課題（タイトル）	景観及び生業に着目した都市近郊における生活形態の実態解明
研究者名※	小松 萌
所属組織※	早稲田大学 創造理工学部建築学科 助手
研究種別	研究助成
研究分野	都市計画、都市景観
助成金額	65 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

() は、報告書提出時所属先。

大林財団 2020年度研究助成実施報告書

所属機関名 早稲田大学創造理工学部建築学科
申請者氏名 小松 萌

研究課題	景観及び生業に着目した都市近郊における生活形態の実態解明
<p>本研究では柿渋生産や茶葉栽培など、食と農を軸とした景観や生業が現在でも色濃く残っている京都府南山城村を対象に、地域特有の景観やそれらを維持継承するための生業に着目して、都市近郊における生活形態の実態を解明することを目的とする。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、人々の居住地に対する価値観は変化しており、テレワークの普及等によって通勤利便性よりもその土地での生き方そのものを重視した居住地選択の可能性が今後も広まっていくと考えられる。これまで都市近郊は、住宅供給地としての機能が重視されてきたが、都心部との容易な往来と豊かな自然環境に恵まれた暮らしが両立可能な地域も多く、多様化する人々の暮らしの受け皿としてポテンシャルを有している。未曾有の事態における移住者の流入や増加に対して、移住者を含めた地域の人々の暮らしと地域特有の景観および生業の維持継承との相互関係を明らかにし、どのようにして地域の景観及び生業を本質的に維持継承しながら、より良い生活形態を体現することができるか、その方法を解明することは喫緊の課題である。</p>	

1. 研究の目的

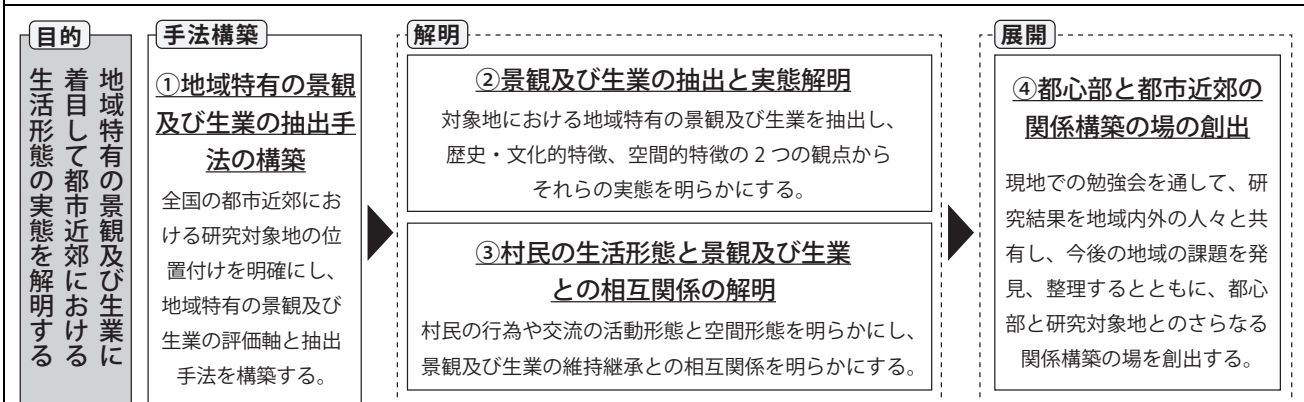


図1 研究の目的と計画

本研究では、**地域特有の景観及び生業に着目して都市近郊における生活形態の実態を解明することを**目的とし、以下、4つの課題を設定し研究を推進する。本研究における生活形態とは日常行為や地域内外での交流などの内容に関する活動形態と、日常行為や交流が行われる場の立地や分布特性、建築デザインなどに関する空間形態の2つにより構成される。

・**地域特有の景観及び生業の抽出手法の構築**: 都市近郊の地域における研究対象地の位置付けを明確にし、関連資料の分析によって地域特有の景観及び生業の評価軸と抽出手法を検討、構築する。

・**景観及び生業の抽出と実態解明**:

構築した抽出手法を用いて、対象地における地域特有の景観及び生業を抽出し、歴史・文化的特徴、空間的特徴の2つの観点からそれらの実態を明らかにする。

・**村民の生活形態と景観及び生業との相互関係の解明**: 村民の日常行為や交流に関して、現地での実地調査によりその活動形態と空間形態を明らかにし、実態を明らかにした景観及び生業の維持継承との相互関係を明らかにする。

・**都心部と都市近郊の関係構築の場の創出**: 現地での勉強会を通して、研究結果を地域内外の人々と共有し、意見交換を行うことで、今後の地域の課題を発見、整理するとともに、都心部と研究対象地とのさらなる関係構築の場を創出する。

本研究は、**都市近郊の立地的な利便性に着目しながらも、地域特有の景観及び生業を日常の行為の中で本質的に維持継承している生活形態の実態を解明する点で極めて独創的である**。近年、都市近郊を含む郊外では空き家バンクを活用した移住促進事業が多く行われているが、本研究によって、建物と人間を合致させるだけでなく、移住先での人間関係や既存住民の受け入れ体制の構築に対しても示唆を得ることができると考えている。新型コロナウイルス感染拡大下において、働き方や暮らし方、社会システム全体が姿を変えつつある今、**都心部と都市近郊との関係性を再考し、地域特有の景観及び生業を維持継承しながら二拠点を往来する新たな暮らし方の実態を解明することは極めて創造性に富んでいる**と考えている。

2. 研究の経過

・研究対象地の位置付け

GIS を用いて首都圏、中部圏、近畿圏の中から、30～60km 圏内に位置する地域を都市近郊として抽出した。これらの地域について、各自治体のホームページから移住促進に関する情報を収集し、特にアピールされている地域資源について整理した。そして、本研究の対象地である京都府南山城村について、食と農の暮らしを軸とした都市と集落の二拠点往来型の居住地域として位置付けた。

・既往研究の整理と手法の検討

既往研究や文献調査から、本研究で用いる調査・分析手法を検討した。具体的には、コンパクトシティや郊外居住に関する既往研究から、都市計画分野における都市近郊の位置付けを明らかにするとともに、地域資源の維持・保全に関する研究や地域資源の評価に関する研究を整理することで、地域特有の景観及び生業の分析手法を整理した。

・地域特有の景観及び生業の仮説的な抽出とその有効性の検証

新型コロナウイルス感染拡大の影響で 8 月下旬に予定していた現地調査を実施することができなかったため、対象地において勉強会や村民の憩いの場として村の内外の人々を結びつける役割を担う「山のテーブル」の主催者にヒアリング調査（オンライン）を実施した。この結果から、「a. 茶畑」「b. 民家」「c. 既存建築を活用した交流拠点」とそこでの関連行為が地域の特徴を強く示す景観及び生業であることが推察され、これらを地域特有の景観及び生業として仮説的に抽出した。その後、仮説的に抽出した地域特有の景観及び生業について、現地でのアンケート・ヒアリング調査によってその有効性を検証した。

・景観及び生業の実態解明と、それらの維持継承と生活形態との相互関係の解明

現地での移住者や農家へのヒアリング調査、地図資料の分析によって、抽出した景観及び生業の実態を明らかにした。また、村民の日常的な行為や他者との交流の実態を明らかにすることで、生活形態と抽出した景観及び生業との相互関係について考察した。

3. 研究の成果

地域特有の景観及び生業の抽出手法の構築

抽出手法の検討

既往研究から、地域特有の景観及び生業の抽出手法を構築することを試みた。その結果、多くの既往研究で現地でのアンケート・ヒアリング調査を用いた住民評価という方法をとっていたため、本研究でもこの手法を用いることとした。一方、新型コロナウイルス感染症の拡大により現地を訪れることが困難であったため、タイナカオフィス代表、對中氏へオンラインでヒアリング調査(2021年8月24日9:30~11:00)を実施し、その結果から地域特有の景観及び生業を仮説的に抽出し、後に実施した現地調査においてその有効性を検証するという方法を選択した。

現地でのアンケート・ヒアリング調査の概要

本研究では、オンラインでのヒアリング調査に加え、現地でのアンケート調査及びヒアリング調査を実施した。本研究では、村の世帯数が少ないこと、コロナ禍により村での大規模な調査が困難であること、広大な村面積に民家が点在する集落構造を有しているため広域での調査が困難であることを踏まえ、より定性的にデータを分析することとした。アンケート調査は現地にて南山城村の職員の方に用紙と返信用封筒(70部)をお渡しし、村民へ配布いただいた。記入済みのアンケートについては、一部は南山城村の職員の方にまとめて回収、郵送していただき、一部は個別に村民より郵送いただいた(回収14部)。また、現地でのヒアリング調査については、表1にその概要を示すように移住者や代々続く農家など、5組の村民を対象に実施した。

表1 ヒアリング(対面)調査概要

調査概要	A	B	C	D	E
日時	2022年3月19日 11:00~12:30	2022年3月19日 14:00~15:00	2022年3月19日 16:00~18:00	2022年3月19日 10:00~11:30	2022年3月19日 15:00~15:30
対象者の概要	高齢の移住者夫婦	代々南山城村に居住する80代女性と娘夫婦	4代夫婦と子供3人の移住家族	代々続く茶農家を継いだ30代男性	代々続く茶農家の50~60代男性
場所	対象者自宅前	対象者自宅及び畑	対象者自宅前	お茶の製造所 (旧田山小学校)	対象者の畑
方法	対面でのヒアリング調査				

景観及び生業の抽出と実態解明

景観及び生業の仮説的な抽出とその有効性の検証

對中氏へのヒアリング調査では、山のテーブルの計画意図、経営体制、山のテーブルでの村民の活動、情報発信媒体、農と関連した住居形態、移住者と既存の村民との関わり、村民と農との関わりなどについて詳細な聞き取りを実施した。その結果、新規移住者が茶農家の繁忙期に作業を手伝うなど、単なる景観としての茶畑ではなく、そこでの行為を通して村民と新規移住者の交流の場にもなっていることがわかった。また、村民の多くが作物の栽培をしており、土間や蔵など、農に関連した住居形態が現存していること、保育園を改修した山のテーブルや民家を改修したやまんなかが計画され、これらの施設が村民の活動の場となるとともに、南山城村の文化や食生活を発信することで移住促進へと繋げる重要な役割を担っていることがわかった。以上より、本研究では「a. 茶畑」「b. 民家」「c. 既存建築を活用した交流拠点」とこれらを維持継承する行為を地域特有の景観及び生業として仮説的に抽出することとした。

この仮説のもと、村民を対象とした現地でのアンケート調査で「a. 茶畑」「b. 民家」「c. 既存建築を活用した交流拠点」について「南山城村らしさ」を5段階で評価してもらった。その結果、図2に示すように「b. 民家」「c. 既存建築を活用した交流拠点」については「どちらも言えない」という評価が含まれるものの、「南山城村らしい」「とても南山城村らしい」という回答が多くなった。以上より、仮説的に抽出した3つの要素は地域特有の景観及び生業として村民に「南山城村らしい」と評価されていると考えた。また、地域特有の風景について、茶畑という回答に続いて山並みや滝・河川という回答が多く見られ、今回抽出した3つ以外にもこのような自然資源が村民に地域特有の資源として認識されていることがわかった。

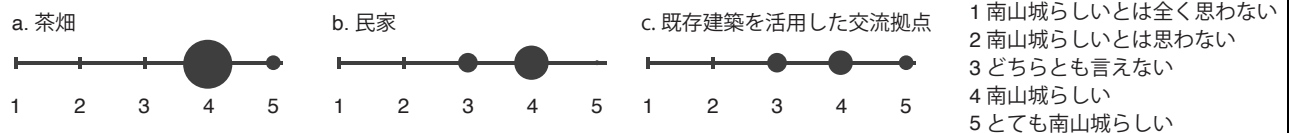


図2 村民による「南山城村らしさ」の評価

抽出した景観及び生業の実態解明

ヒアリング調査で明らかにした「a. 茶畑」「b. 民家」「c. 既存建築を活用した交流拠点」の実態について、時間軸に着目して整理し、表2にその内容を抜粋して示した。第一に「a. 茶畑」について、過去から未来に関連するものまで数多くの発言があり、過去に関しては主に、茶葉の栽培で生計を立てていた頃の村の様子や共同加工場の利用変遷に関する発言が見られた。現在に関しては高齢化による生産者の減少や、それに伴う茶畑の放棄地化、ソーラーパネルの設置による景観への影響などに関する発言が見られ、茶畑が抱える課題が明らかになった。さらに未来に関しては、主に若手農家から、茶畑やお茶の文化を継承するためのイベントを実施したいなどの意欲的な発言が見られた。第二に「b. 民家」について、古くから残る民家が移住の決め手であったこと、現在では野菜の交換やおしゃべりの場として重要な役割を担っていること、家や土地を守るという意識が強く、移住者に家を貸すハードルが高いことが明らかになった。第三に「c. 既存建築を活用した交流拠点」について、既存建築を活用した交流拠点として山のテーブル、やまんなか、旧田山小学校が挙げられており、そこでのイベント参加が移住のきっかけになった事例があった。また、これらの拠点が村民や、移住者、移住希望者の交流・情報交換の場として利用されている実態が明らかになった。

表2 景観及び生業の実態に関する発言

	a. 茶畑	b. 民家	c. 既存建築を活用した交流拠点
過去	<ul style="list-style-type: none"> 以前は共同工場でお茶の加工をしていた。 かつては100軒くらいの茶農家があった。 昔はお茶の栽培だけで生活できていた。 高齢になって、茶畑を畑に変えた。 	<ul style="list-style-type: none"> 車が入れ、柱がしっかりしていたことが決め手でこの家に移住した。 今では手に入らないような材料が使われている。 「おくどさん」を残せばよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 山のテーブルでやっていた「山の上マーケット」に参加して、童仙坊に興味を持ち、南山城村に移住することを決めた。
現在	<ul style="list-style-type: none"> 共同工場は減ってきている。 暮らしの中で保全するというイメージ。 放棄地も多く、ソーラパネルにするとところもある。 茶農家は減ったが、他の人の畑を任せられることもあり1人あたりの面積は増えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 家でよく集まったりする。絵画教室や展示会も行っている。 家の周りに茶畑という風景は珍しく地区によって違う。 前に住んでいた人が直してくれた家に住んでいる。空き家になっている古民家も多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 村の人が先生になって教える「学びのテーブル」を山のテーブルでやっている。 やまんなかに移住希望者が来て、移住者同士の会話も行われている。 旧田山小学校で地域の人と話す機会がある。
未来	<ul style="list-style-type: none"> 今後、茶摘みのイベント等は増やしていきたい。 キャンプ場にしようとしている人もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 代々の家や土地を守るという執着は凄い。 	

村民の生活形態と景観及び生業との相互関係の解明

村民の生活形態の実態解明

アンケートやヒアリング調査で明らかになった村民の日常的な行為や他者との交流について、図3にその内容と対応する場所を示す。図3に示すように、日常的によく利用する場所や、他者との交流の場として山のテーブル、直売所・やましろホール、古民家を改修した移住者の個人宅、道の駅、やまんなかが挙げられ、特にスーパーマーケットや商店、コンビニエンスストアがない村の中で、直売所や道の駅といった食を扱う場所が日常的に訪れる場所として村民に親しまれていることが明らかになった。また、これらの場所は各地区に点在しており、村民が日常的に地区を越えて移動していることがわかった。地域特有の景観及び生業として高く評価された「a.茶畑」については、村民が日常的によく利用する場や他者との交流の場としては挙がらなかったものの、茶農家への調査では、茶畑で作業している際に村民と立ち話をするといった様子を伺うことができた。

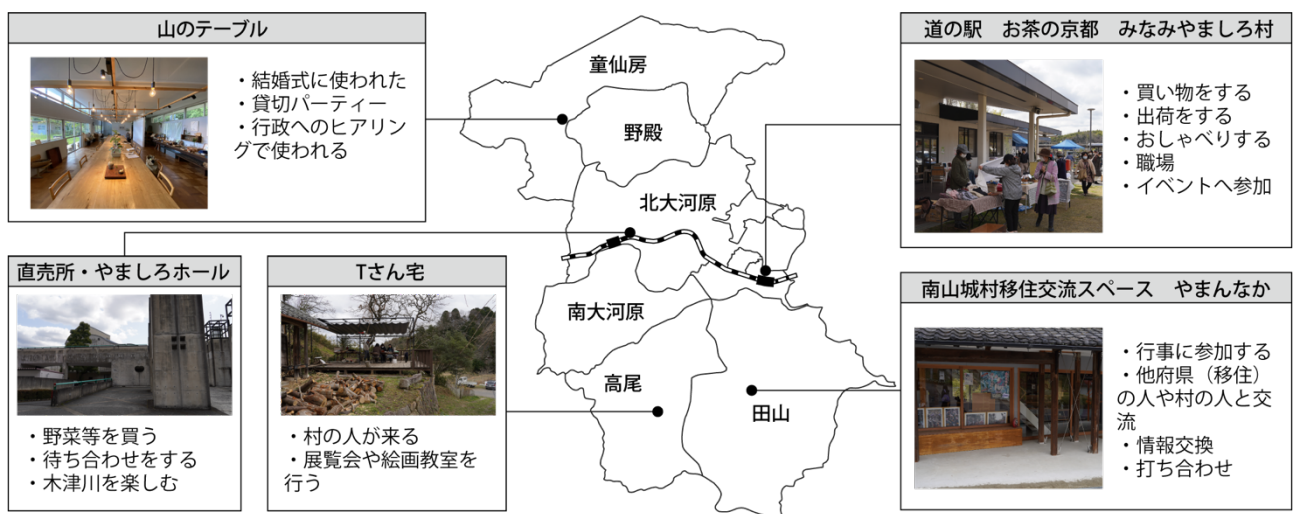


図3 村民の日常行為と他者との交流の実態

相互関係の考察

「b. 民家」「c. 既存建築を活用した交流拠点」については、地域特有の景観及び生業として評価されていると同時に、村民が日常的に利用する場や他者と交流するための場にもなっていた。ヒアリング調査の結果、村民の中にはこれらの景観及び生業を維持継承するために活動しているという認識はあまりなく、日常的な何気ない生活行為の結果として、これらの維持継承がなされているといえる。このように、村の中で受け継がれてきた景観や生業が存在するからこそ、農や食を軸とした南山城村での生活形態が存在し、反対に村民による生活形態が地域の景観や生業の維持継承に繋がっているといえ、両者には強い相互関係が存在すると考察することができる。他方、「a. 茶畑」については、地域特有の景観及び生業として高く評価されているものの、実質的にその維持継承に関わるのは農家に限られているため、「b. 民家」や「c. 既存建築を活用した交流拠点」と村民の生活形態との関係とは異なっていると考えることができる。しかしながら、南山城村ではかつての茶農家が現在でも規模を縮小して自家用の茶葉を栽培しているケースが多いため、そのような家庭では現在でも「a. 茶畑」での関連する行為がすなわち日常的な行為であり、この場合は「b. 民家」や「c. 既存建築を活用した交流拠点」のような強い相互関係をみることができると考えられる。

4. 今後の課題

本研究では 8 月の現地調査を実施できなかった影響で、研究計画に記載の村民の生活形態と景観及び生業との相互関係の解明に留まり、当初予定していた都心部と都市近郊の関係構築の場の創出を実施することができなかった。本研究で構築した村民との関係性を基に、今後とも南山城村での研究活動を継続していきたいと考えている。また、生活形態と景観及び生業との相互関係について、現時点では農家として携わっていた大規模な農業をリタイアした高齢者が、自分でできる規模に縮小して畑を続けているため、農を軸とした村民の生業や生活形態の実態を捉えることができたと考えられる。一方で、高齢化の進行によって作物を栽培する人は減少していくことが予測でき、また南山城村では親族であっても茶の栽培技術や加工技術を伝承しないという慣わしが存在することがヒアリング調査で明らかになっているため、今後、農業に関わってこなかった世代が村の中心的存在となった際に、どのようにして生活形態と景観及び生業との関係性を構築することができるか、今後の研究で着目していくべき課題であると考えている。